

# 口腔扁平上皮癌の化学療法剤および血管新生阻害剤による転移抑制効果に関する実験的研究

著者	川尻 秀一
著者別表示	Kawashiri Shuichi
雑誌名	平成12(2000)年度 科学研究費補助金 奨励研究(A) 研究概要
巻	1999 2000
ページ	2p.
発行年	2016-04-21
URL	<a href="http://doi.org/10.24517/00060713">http://doi.org/10.24517/00060713</a>



# 口腔扁平上皮癌の化学療法剤および血管新生阻害剤による転移抑制効果に関する実験的研究

Research Project

All

## Project/Area Number

11771268

## Research Category

Grant-in-Aid for Encouragement of Young Scientists (A)

## Allocation Type

Single-year Grants

## Research Field

Surgical dentistry

## Research Institution

Kanazawa University

## Principal Investigator

川尻 秀一 (川尻 修一) 金沢大学, 医学部, 助手 (30291371)

## Project Period (FY)

1999 - 2000

## Project Status

Completed (Fiscal Year 2000)

## Budget Amount \*help

¥2,400,000 (Direct Cost: ¥2,400,000)

Fiscal Year 2000: ¥1,000,000 (Direct Cost: ¥1,000,000)

Fiscal Year 1999: ¥1,400,000 (Direct Cost: ¥1,400,000)

## Keywords

口腔癌 / 浸潤 / 転移 / 抗癌剤 / 血管新生阻害剤 / 扁平上皮癌 / 化学療法剤 / 転移抑制

## Research Abstract

12年度は口腔扁平上皮癌の浸潤と転移を臨床に近い状態で再現できる正所性移植モデルを用いて、特に日常の臨床で使用している抗癌剤に増殖のみならず、浸潤や転移に対する抑制効果があるのか否かを検討した。高浸潤高転移性のヒト口腔扁平上皮癌細胞株のOSC-19をヌードマウスの口底に移植した後に、シスプラチンまたはペプロマイシンを移植後7日目または14日目に投与し、各抗癌剤ならびに各投与時期の違いによる腫瘍増殖に対する効果、浸潤に対する効果、転移に対する効果について検討した。増殖抑制効果では抗癌剤投与により平均38%の腫瘍縮小効果が認められ、PCNA陽性細胞率も有意に低下した。対照群の口底腫瘍は4C型の浸潤様式を呈していたが、抗癌剤投与群の浸潤様式は3型が72.7~81.8%と多く、抗癌剤投与によって腫瘍の浸潤抑制効果が観察された。対照群の頸部リンパ節転移形成率は90.9%であったのに対して、抗癌剤の7日目投与群ではリンパ節転移形成率は45.5%と有意に低下し、また転移リンパ節内での腫瘍進展度も抑制されていた。また、血管新生阻害剤(TNP-470)を本モデルに同様に使用し、増殖、浸潤ならびに転移抑制効果の有無についても検討を行った。その結果では、増殖、浸潤、転移にそれぞれ一定以上の抑制効果が認められた。しかし、本剤においては特に局所腫瘍の増殖に対しての効果が大きく、それにつれて浸潤や転移の時期が遅くなっている印象であった。

# Report (2 results)

---

2000 Annual Research Report

1999 Annual Research Report

**URL:** <https://kaken.nii.ac.jp/grant/KAKENHI-PROJECT-11771268/>

Published: 1999-03-31 Modified: 2016-04-21